

ブック NOTICE OF BOOK 紹介

ビル・エモット著 ● PHP新書 (2009年12月29日発刊)

世界潮流の読み方



著者のビル・エモット氏は、1956年ロンドン生まれで、1993〜2006年まで

英国『エコノミスト』誌の編集長を務めた人。

日本のバブル崩壊を予測した90年の著「日は

また沈む」がベストセラーになった。200

6年には、日本経済の復活を宣言した「日は

また昇る」で再び話題となった。

本書は、序章「欧米の失速で日本経済はどうなるか」、第1章「日本の課題と挑戦」、第2章「中国と世界の注目を浴びて」、第3章「変容するアジア大陸」、第4章「アメリカと信用収縮に苦悩する大国」、第5章「ヨーロッパと新たな課題を乗り越える」、第6章「中近東とアフリカと紛争を終結できるか」、第7章「グローバル化と地球温暖化」、第8章「レジャーと娯楽」の全8章から構成されている。日本が直面する様々な課題について、地球規模で

考える著者の機知に富んだ考察には学ぶ所が多かった。

最低賃金の引き上げは 日本経済にとってプラスになる

第1章「日本の課題と挑戦」の中には、「最低賃金の引き上げは日本経済にとってプラスになる」とのタイトルが目をついた。英国ジャーナリストの眼には、日本の最低賃金の最近の動向はどう映っているのか興味を覚えた。最近の円高によって当時と事情は異なるが、「日本の自民党政権が実施したことは、生活保護受給額を下回らないように、最低賃金を改正しただけなのだ。日本での最低賃金は、地方によって異なり、東京では1時間当たり739円だが、全国平均は1時間687円である(2007年度)。

この金額は、ドイツの労働者が要求している水準や、英国の最低賃金(1時間約1250円)2007年12月当時)に比べ、はるかに少ない。東京の最低賃金は、英国で16歳から17歳の最若年労働者に適用される水準とほぼ同じなのである」

「野党民主党は、格差社会問題を与党攻撃の材

料としているが、政治的に考えると、最低賃金の引き上げは、不平等の懸念を払拭する格好の対応となる。 (中略) 日本で最低賃金を引き上げるとは、非効率で悪評高いサービス産業の生産性向上を促し、企業利潤だけでなく、広く経済発展にも資することになる」と述べている。

第8章の「レジャーと娯楽」の中では、「イギリスの小さな町の書籍祭り」がありきたりの情報に満足できない人々」は面白かった。イギリスの片田舎の町で毎年5月下旬から6月初めに2週間にわたって8万人の人々が集まって開かれる書籍祭りが紹介されている。この「ダミシング・ダウン」(知的水準低下)の時代にあつて、なぜ多くのイギリス人が、このようなフェスティバルに大勢行くのだろうか。「一つの答えは、このような時代そのものに対する反動ではないか」人々は彼ら(作者)を実際に見て、生の声を聞きたがつているのだ」「フェスティバルの参加者が求めているものの本質は、情報過多の時代にあつて、何か特別のもの、極上のもので、通常体験できないような何かを欲している。ありきたりではなく、自分しか体験できないことを、人々は何らかの方法で求めている。これが最大の理由ではないだろうか」。日本も超高齢時代を迎え、自分探しの旅が始まっている。

(渡辺美知夫・記)